

思考錯誤を重ねた 50年ぶりの本堂大改修

日光山輪王寺

50年ぶりの大改修工事

今や押しも押されぬ我が国の代表的な観光地となった栃木県日光。年間1,100万人を超える観光客がこの地を訪れ、外国人の数もうなぎ登りである。彼らの視線の先は、平成11(1999)年わが国で10番目となる「世界遺産」に登録された計103棟からなる社寺群である。そのうちのひとつ輪王寺の本堂(三仏堂)が、今50年ぶりの大改修の最中である。

輪王寺本堂の再建は、三代将軍・徳川家光公の時代の正保4(1647)年。江戸時代には中・小規模な定期的修理が14回行われているが、1回目の大改修は明治12(1879)年のこと。日光山としてひとつの地であったこの地も、明治政府の神仏分離政策により輪王寺、東照宮、二荒山神社と分かれ、この時二荒山神社にあったお堂を輪王寺へ解体移築した。これが第1回目の大改修である。その後、昭和36(1961)年にも行われ、今回が50年ぶりの大改修となった。

平成19(2007)年に着工し、平成22(2010)年には完了する予定であった。しかし、調査をするうちに様々な問題点が生じ、ほぼ10年延びることになったのである。

新しい視点で古さを生かす

このあたりの事情を計画段階から指揮を執られる公益財団法人日光社寺文化財保存会 上席主任技師 原田正彦氏はこう言われる。

—今回の改修は、建物外側の低い部分の塗装が中心で、3年で終わる予定でした。しかし、柱の根継ぎ補修の際、外部からは判らない大きな虫食いが見つかりました。念のため超音波診断したところ、至る所に虫食いが入っていて、結局3年で終わる予定が10年近く延びてしまいました。文化財保存の考え方は「古い部材をできるだけ生かして安全性を確保する」のが基本です。その



上席主任技師
原田 正彦氏

姿勢を貫いた結果の期間延長です。

今回改修した2,200m²の屋根は、厚さ0.6mmの3枚重ね銅瓦葺きです。屋根についても、文化財だから同じ葺き方で戻すことが原則ですが、文化財建造物を長期活用保存し、後世へ継承するため、破損している部分はその原因をつき止め、新たな改善策を盛り込んでいきました。

前回の改修の際、屋根を大幅に軽量化する目的で、薄い銅板を織り込んで、3枚重ねのように見せかける工法がとられました。“だまし3枚重ね”ともいうんでしょうか。これが原因であちこちに亀裂が見られたので、本来の工法に戻しました。

薬師堂(本地堂)で使用した寛永13(1636)年の銅瓦を原版として丸瓦、平瓦の型を作りプレス加工しています。昔は手打ちですから銅板に槌目が残り、重ねても水が浸透していくことはありません。でも今の銅板はとにかくフラットですから、どうしても水が入り込んでしまう。あえて凹凸を付けました。さらに構造上、雨水の集中する所は原寸模型を作り、上部から大量の水を一気に流してその水がどう流れるのかを調べ、形状を改善……さまざまな工夫、改善を凝らしました。屋根工事は平成30年5月で終わる予定です。長い年月がかかりましたが、文化財保存のため万全を期したつもりです—



急ピッチで進められる銅瓦葺き屋根工事